

今日<sup>きょう</sup>は聖霊<sup>せいれい</sup>降臨<sup>こうりん</sup>の祭日<sup>さいじつ</sup>で、教会<sup>きょうかい</sup>の誕生日<sup>たんじょうび</sup>でもあります。イエス様<sup>さま</sup>はかつて、最後<sup>さいご</sup>の晩<sup>ばん</sup>さんの時<sup>とき</sup>、弟子<sup>でし</sup>たちのための弁護<sup>べんご</sup>者<sup>しゃ</sup>であり、真理<sup>しんり</sup>の霊<sup>れい</sup>である聖霊<sup>せいれい</sup>を送<sup>おく</sup>ることを約束<sup>やくそく</sup>していただきました。それはご自分<sup>じぶん</sup>の受難<sup>じゆなん</sup>と死<sup>し</sup>によって不安<sup>ふあん</sup>と恐怖<sup>きょうふ</sup>に包<sup>つつ</sup>まれてしまう弟子<sup>でし</sup>たちを安心<sup>あんしん</sup>させ、また、彼ら<sup>かれ</sup>が成<sup>な</sup>し遂<sup>と</sup>げるべき使命<sup>しめい</sup>を支<sup>ささ</sup>えてくださるため<sup>ため</sup>だったのです。実際<sup>じっさい</sup>、イエス様<sup>さま</sup>が逮捕<sup>たいほ</sup>されてから弟子<sup>でし</sup>たちは、まるで芯<sup>しん</sup>を失<sup>うしな</sup>ったようになり、一部<sup>いちぶ</sup>の弟子<sup>でし</sup>たちは田舎<sup>いなか</sup>へ逃<sup>に</sup>げたり、また、残<sup>のこ</sup>っていた弟子<sup>でし</sup>たちもユダヤ人<sup>じん</sup>を恐<sup>おそ</sup>れ、自分<sup>じぶん</sup>たちのいる所<sup>ところ</sup>の門<sup>もん</sup>に鍵<sup>かぎ</sup>をかけて過<sup>す</sup>ごしたりしました。しかし、イエス様<sup>さま</sup>は復活<sup>ふっかつ</sup>され、田舎<sup>いなか</sup>へ行<sup>い</sup>った弟子<sup>でし</sup>たちに現<sup>あらわ</sup>れて彼ら<sup>かれ</sup>を悟<sup>さと</sup>らせ、残<sup>のこ</sup>っている仲間<sup>なかま</sup>たちのところ<sup>ところ</sup>へ立<sup>た</sup>ち返<sup>かえ</sup>るよう<sup>よう</sup>にしてくださいました。また、家<sup>いえ</sup>の門<sup>もん</sup>に鍵<sup>かぎ</sup>をかけたまま、不安<sup>ふあん</sup>と絶<sup>ぜつ</sup>望<sup>ぼう</sup>、恐怖<sup>きょうふ</sup>に包<sup>つつ</sup>まれて隠<sup>かく</sup>れていた弟子<sup>でし</sup>たちの目<sup>め</sup>の前<sup>まえ</sup>に、どん<sup>さ</sup>ま<sup>た</sup>な妨<sup>う</sup>げも受<sup>あ</sup>ら<sup>わ</sup>ず<sup>ず</sup>に現<sup>あらわ</sup>れて、彼ら<sup>かれ</sup>に平和<sup>へいわ</sup>を授<sup>さ</sup>げ、更<sup>さら</sup>に、命<sup>いのち</sup>の息吹<sup>いぶき</sup>を吹<sup>ふ</sup>きかけられました。こうして、イエス様<sup>さま</sup>は弟子<sup>でし</sup>たちの不安<sup>ふあん</sup>を平和<sup>へいわ</sup>に、絶<sup>ぜつ</sup>望<sup>ぼう</sup>を希<sup>き</sup>望<sup>ぼう</sup>に、恐怖<sup>きょうふ</sup>を勇<sup>ゆう</sup>気<sup>き</sup>に変<sup>か</sup>えてくださったのです。そして、四十<sup>よんじゅう</sup>日に渡<sup>わた</sup>って彼ら<sup>かれ</sup>に現<sup>あらわ</sup>れ、彼ら<sup>かれ</sup>が聖霊<sup>せいれい</sup>の降臨<sup>こうりん</sup>の準備<sup>じゅんび</sup>をするよう<sup>よう</sup>にと導<sup>みちび</sup>いてくださいました。勿<sup>もちろん</sup>論<sup>でし</sup>、弟子<sup>じぶん</sup>たちはまだ、自分<sup>みらい</sup>たちの未来<sup>みらい</sup>についての心配<sup>しんぱい</sup>や不安<sup>ふあん</sup>をも抱<sup>だ</sup>いていたに違<sup>ちが</sup>いありません。しかし今日<sup>きょう</sup>、イエス様<sup>さま</sup>はその弟子<sup>でし</sup>たちに約束<sup>やくそく</sup>された「高<sup>たか</sup>い所<sup>ところ</sup>からの力<sup>ちから</sup>」、つまり、聖霊<sup>せいれい</sup>を送<sup>おく</sup>ってくださったのです。その聖霊<sup>せいれい</sup>をいただいた弟子<sup>でし</sup>たちは、もはや弟子<sup>でし</sup>ではなく「使徒<sup>しと</sup>」となり、イエス様<sup>さま</sup>を通<sup>とお</sup>して示<sup>しめ</sup>された神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>の救<sup>すく</sup>いの御業<sup>みわざ</sup>の証人<sup>しょうじん</sup>としてイエス様<sup>さま</sup>の福音<sup>ふくいん</sup>を宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>え、至<sup>いた</sup>る所<sup>ところ</sup>で教会<sup>きょうかい</sup>をたてたのです。そういう訳<sup>わけ</sup>で、今日<sup>きょう</sup>は教会<sup>きょうかい</sup>の誕生日<sup>たんじょうび</sup>と言<sup>い</sup>われるのです。

今日<sup>きょう</sup>の福音<sup>ふくいん</sup>で、受難<sup>じゆなん</sup>を控<sup>ひか</sup>えておられたイエス様<sup>さま</sup>は聖霊<sup>せいれい</sup>についておっしゃいました。イエス様<sup>さま</sup>は、その聖霊<sup>せいれい</sup>が永遠<sup>えいえん</sup>に弟子<sup>でし</sup>たちと一緒<sup>いっしょ</sup>におられ、イエス様<sup>さま</sup>ご自身<sup>じしん</sup>の教<sup>おし</sup>えを悟<sup>さと</sup>らせてくださると言<sup>い</sup>われました。ところが、福音<sup>ふくいん</sup>の中<sup>なか</sup>でイエス様<sup>さま</sup>は二回<sup>に</sup>にわたって、「あなた<sup>あなた</sup>がたは、わたし<sup>わたし</sup>を愛<sup>あい</sup>しているならば、わたし<sup>わたし</sup>の掟<sup>おきて</sup>を守<sup>まも</sup>る。」と言<sup>い</sup>われ、更<sup>さら</sup>に、「わたし<sup>わたし</sup>を愛<sup>あい</sup>する人<sup>ひと</sup>は、わたし<sup>わたし</sup>の言葉<sup>ことば</sup>を守<sup>まも</sup>る。」ともおっしゃいました。この話<sup>はなし</sup>の意味<sup>い</sup>は何<sup>なん</sup>でしょうか。それは、イエス様<sup>さま</sup>の掟<sup>おきて</sup>と御言葉<sup>みことば</sup>を守<sup>まも</sup>るため<sup>ため</sup>には、聖霊<sup>せいれい</sup>をいただき、素直<sup>すなお</sup>な心<sup>こころ</sup>で聖霊<sup>せいれい</sup>に從<sup>したが</sup>わねばならないということでしょう。言<sup>い</sup>い換<sup>か</sup>えれ

ば、聖霊に従わないと、イエス様の教えを悟ることや、イエス様の掟と御言葉を守ることもできなくなり、そうすると、イエス様を愛しているとは言えないということです。そこで、イエス様は「わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。」とも言われたわけです。確かに、イエス様を愛さない人やイエス様の教えと御言葉、また、愛し合いなさいと言う掟を守らない人を、信仰のある人だとは言えないでしょう。このように、今日の福音でイエス様は、聖霊と信仰との関係性をはっきりと示し、また、わたしたちが聖霊によってご自分との愛の絆に与れることも教えてくださったのです。

イエス様とのその愛の絆に与る人たちについては、今日の第二朗読にも記されていますが、彼らはキリストに属し、その霊の支配下にいて、その聖霊に従い、また、純粋な心で導かれます。使徒パウロはその人こそが神様の子なのだと言い、更に、キリストと共に神様の共同の相続人となるとも言いました。その人たちが受け継ぐ相続とは、言うまでもなく神様の永遠の命でしょう。実に、神様をご自分の独り子のイエス様を世にお遣わしになったのは、世を滅ぼすためではなく、イエス様を通して世を救うためでした。慈しみ深い神様が望まれたのは、イエス様を信じて、イエス様の教えと御言葉を受け入れ、また、イエス様の掟を守る人は誰でも、復活されたイエス様の永遠の命に与ることだったのです。その神様からの救いの恵みをうけるには、どんな壁もありません。それについては今日の第一朗読にも書いてありますが、炎のような舌の形で弟子たちに降り注がれた聖霊は、彼らを隠れ家から公へと連れ出し、イエス様が成し遂げられた神様の救いの御業を宣べ伝えるよう導かれたのです。そこには五旬節の祭りのためにあらゆる地域や国から多くの人たちが集まっていますが、彼らは皆、自分たちの地域や国の言葉でその救いの福音を聞き、信仰の道に導かれました。その救いの恵みは今の時代のわたしたちにも与えられ、わたしたちは水と聖霊による洗礼を受け、主の晩さんの記念であるこのミサに与り、その永遠の命の糧をいただきながら、神様の国への道を歩んでいるわけです。ですから、わたしたちも今までの自分を捨て、互いに愛し合うことによって、イエス様の教えと御言葉と掟を守るべきだと思います。また、わたしたちの信仰を世に向かって宣べ伝え、証しし、多くの人たちを信仰の道に導く人とな

らなければならないと思います。そのために、聖霊の恵みを祈り求めながら、その聖霊に従って生きていきたいと思ひます。

さて、日本の昔話に、「おぶさりたい」というお話があります。山里に住んでいた三人兄弟「太郎、二郎、三郎」に現れたお化けの話です。夜中の山道で「おぶさりたいよう、抱かさりたいなあ」と言いながら近寄ってくるお化けに会った太郎は怖くて逃げ去り、その兄をあざ笑った二郎も結局そのお化けの正体を明かせませんでした。しかし、三郎は勇気をもってそのお化けと向き合い、それをおぶって家に帰りました。でも、そのお化けを降ろすことができず、最後に家の大黒柱にぶつけたとたん、お化けから多くの大判小判が散らばって、三人兄弟は代々金持ちとなったというお話です。聖霊はお化けではありませんが、聖霊も私たちにおんぶされたがっておられるかもしれません。私たちが聖霊をおんぶするには勇気が必要です。その勇気とは古い自分を捨てる勇気です。私たちが自分の古い思い、言葉、行いを捨て、愛の聖霊をおぶったら、聖霊は想像以上の賜物を与えて下さるでしょう。これからも信者の皆さんが愛の聖霊に従うことができるようお祈りいたします。